

所 陵

No. 63

[SENRYO/KANSAI UNIVERSITY MUSEUM REPORT]



貝輪未製品 (Shell Bracelets in progress)

● 目 次 ●

モン・サン・ミシェルとセント・マイクルズ・マウント	朝治 啓三	2
植田兼司氏寄託の盤子	米田 文孝	4
大坂のねりもの	北川 博子	6
美ら海の「やちむん」	熊 博毅	8
年頭行事の飾り物	森本 安紀	10
関西大学博物館蔵 磨製石剣2点について	金 大珍	12
登録有形文化財 関西大学博物館蔵本山彦一蒐集資料		14

関西大学博物館

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号

Tel. 06-6368-1171 (直通) Fax. 06-6388-9928

<http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/index.html>

モン・サン・ミシェルとセント・マイクルズ・マウント

朝 治 啓 三

ヴォラギネ『黄金伝説』によれば、大天使ミカエルになぞらえられる、アンチ・キリストとの戦いの主人公は、5世紀ごろ南イタリアのガルガーノ山の羊飼いの放った毒矢の向きを変えたという。司教が神に事の故を尋ねると、聖ミカエルが現れて自らがその地の守護者であることを教えたという。アプリカの町の近くトゥンバの山は海に囲まれた島であるが、聖ミカエルの日（9月29日）に2度潮が引いて陸とつながり、参詣者がそこを歩いて島の教会に詣でる。伝説によれば8世紀、ある身重の婦人が渡る途中で潮が満ち、溺れそうになったところを聖ミカエルが救ったという。アプリカは現代フランス語ではノルマンディのアヴランシュ(写真5)のことで、その地の司教の夢に現れた聖ミカエルのお告げにより、その島に最初の礼拝堂が建てられ、その後ベネディクト派修道院が開かれて、モン・サン・ミシェルと呼ばれるようになったといわれている。(写真1, 2)

伝説によれば、イングランド南部の世界遺産都市ペンザンスの近くにあるセント・マイクルズ・マウントの島には、コーモランという名の巨人が住んでおり、大食漢で村人の羊などを盗んで食べていた。ある日ジャックという名の少年が巨人の寝ている間に穴を掘り、角笛で起こして穴に落としてみた。495年頃大天使ミカエルの幻影がその地の漁夫の前に現れたことから、6世紀までには巡礼地となっていた。11世紀にフランスのベックの修道院長によって島の頂上に礼拝堂が建てられ、後にベネディクト派の修道院が開かれたという。この島に渡るには、現在でも干潮時に現れる道を利用する。(写真3, 4)

仏ノルマンディと英コーンウォールのそれぞれのモン・サン・ミシェルに共通するのは、本土との間が砂州でつながった小島に礼拝堂が建てられていること、そのきっかけが、聖ミカエルが司教や漁夫の夢枕に立ってお告げであったこと、アンチ・キリストになぞらえられる巨人の介在であろう。注目すべき点は、いずれも

信者の信仰を促進する超現実的霊験が、礼拝堂設置のきっかけになっているということである。

現在では、ノルマンディのものは限られた数の修道士が居住するものの、修道院としての実質は失われており、国家が施設を管理し観光用に公開している。コーンウォールのそれは、16世紀の修道院解散によって国王管理下に移され、17世紀の革命時に個人所有地となり、現在もその家系が所有している。施設の管理はナショナル・トラストが行い、観光用に公開している。

両施設とも中世においては社会から隠遁した修道士のための施設であり、旅人の救護所や老人の介護所としても機能していたが、俗人信徒に公開された場所ではなかった。公開されたのは19世紀になってからである。このように施設の設定者の目的は、時代によって異なる。

古代ギリシャにおける、デルフォイの神殿という博物館になぞらえられる施設の設定目的は、岡道男に拠れば、ポリスの市民の宗教と学問研究意欲促進であったという。神官の職は閉鎖的ではなく、途中で辞任する者もいたが世襲する者もいた。政策の当否、戦争の可否等についての神託を得ることが神殿設置の目的であった。アレクサンドリアのムーセイオンには大量の書物が集められ、約100人の学者が研究し講義を行った。宗教儀式も不可欠で、シンポジウムにはプトレマイオス朝の王も出席して学者と討議した。限られた能力者のための施設であった。(『西洋古典論集 別冊』2001年、京大文学部)

中世においては、カロリング家のシャルルマーニュはヨーロッパ各地から学者をアーヘンの宮廷へと招き、その後彼らは教会や修道院の職務に就いた。その付属学校ではラテン語が教授され、フランク帝国の官僚養成の必要を満たす場となった。そこは古代とは別の意味で宗教施設であり、同時に権力維持のために機能する教育所であった。その意味では、自由な学問研究や、広く信徒一般向けに開放される意図は、そこには無い。



写真1 モン・サン・ミシェル



写真2 モン・サン・ミシェルと本土をつなぐ道路



写真3 コーンウォールのベンザンスから見た
セント・マイクルズ・マウント



写真4 セント・マイクルズ・マウント満潮時



写真5 アヴランシュ

モン・サン・ミ歇尔の場合には、中世には修道院として権力者によって設立され、18世紀のフランス革命によって修道院としての機能を終えた。その後は宗教色や政治色が後退して、国家が国民のための観光施設として、一般客向けに公開している。セント・マイクルズ・マウントの場合もほぼ同様の道筋を辿った。世界遺産としての指定を受けてからは一層、国外からの観光客に対しても国内観光者と同様の開示が実行され、宗教政治性よりも文化的価値を強くアピールする博物館としての施設になった。

古代、中世の博物館と近代のそれとは、その設置目的が全く異なっている。19世紀に成立した近代国民国家における博物館設置目的は、情報の公開、知識の共有、知的レヴェルの向上であり、観客である国民に、国政の主権の一端を

担う為に必要な情報を供用することである。施設運営者が多数の入場者を動員して営業収入を挙げるとか、人気のある展示や企画を考えつくことが学芸員の力量であると見なすのでは、19世紀になってようやく一般公開が始まり、運営が公的に行われるようになったことの歴史的意味を理解できない。

モン・サン・ミ歇尔へ現代の観光客が押し寄せるのは、信仰目的ではない。学問研究目的でもない。知識を獲得し、雰囲気を感じ、思考の肥しとするというのが、一般公開が実際に果たしている役割であろう。管理者・運営者が施設を公開する目的が信仰の奨励、学問研究の推進、その他の何であれ、観客にはその意図は強要され得ない。現代の公共博物館の公開が持つ社会的役割は、モン・サン・ミ歇尔によって具体的に示されている。

マルク・ブロック『歴史のための弁明』に拠れば、歴史好きの片鱗は博物館的知的好奇心に見られるという。人は何故博物館に向かうのか。博物館設置者は何のために展示物を公開しているのか。来場目的と公開目的が一致した時に、博物館はもっともよくその役割を果たすといえるであろう。博物館といっても人文系、社会系、自然系があり、公営と私営とで随分と異なるであろうから、一概には言えないが。

植田兼司氏寄託の鑿子

米 田 文 孝

植田兼司氏から、寄託を受けた寺院用仏具資料は、鑿子と鑿子台、鑿子布団、鑿子撥の一具計4点である。以下、紙幅の都合から、余韻の長い音色を特色とする鑿子に絞っていこう。

鑿子は日蓮宗以外の各宗派で多用される梵音具で、鑿子または磬子、金子、銅鉢ともいう。禅宗寺院における規矩や行事、器物などを詳述した無著道忠著の『禅林象器箋』(第27類唄器門)には「磬」としてみえ、仏前に置いて行香・看經の時や剃髪時に打ち鳴らすとある。『祇園図經』には5升を受ける容量があると記される。伝世品では永禄8(1565)年の箱銘がある愛知県妙興寺の鋤起技法による遺例や、中国・乾隆6(1741)年銘のある鑄造技法による鉄製品の遺例などがある。現用品の鑿子は口径18cm～60cm前後を測るが、禅宗では口径30cm～60cmの大型品が、浄土真宗では直径40cm以下の中型～小型品が好まれるなど、宗派により異なる。

さて、鑿子の素材は真鍮(黄銅)や銅、鑄鉄などがあるが、本例は真鍮を用いて鋤起技法で製作されたものと推測できる。その法量は口径40.7cm、器高34.0cmを測り、重量は約9.5kgである。器厚は内面からの敲打痕のため一定しないが、口縁部上端で1.2cm、胴部は底部(約0.5cm)を除いて0.2cm～0.3cm前後と薄い。また、口縁部上面は水平ではなく、大きく15個の円弧が連続して紋様状に施されるため、わずかに波打っている。

なお、口縁部外面には「天保三辰年正月天王寺茶臼山邦福寺什物現住文江求之施主因講中」と29文字が鑿で陰刻されており、年号から1832年前後に製作・寄進されたこと、天王寺茶臼山邦福寺という寺名から、明僧隠元隆琦を開祖とする黄檗宗の地方寺院のひとつに寄進された仏具であることが判明する。

この和気山邦福寺(現・統国寺)は大阪市天王寺区にあり、雲水邦福寺とも称される。寺伝によると、大坂夏の陣で焼失した聖徳太子創建の念仏寺跡に、後水尾天皇の皇子である黄檗僧

法眼道印(法源)が再建したのが邦福寺という。本堂は江戸時代中期(元禄16年・1703年)の竣工で5間×4間の鉦葺建物である。現在は畳敷きに改装されているが、本来は黄檗宗の建築様式に則った中国風の磚敷床面であった。『浪花百景付都名所』(国会図書館蔵)の錦絵にも「雲水邦福寺」として採録された名刹である。

さて、本例の外面を見ると、表面に残された製作加工痕の特徴から3区分(①～③)できる。①口縁部上端から5.5cm付近まで斜方向の細かいヤスリ掛けが施されており、器面は平滑である。②その下位部分の幅約10cmは内面からの鋤による敲打痕が看取できるものの凹凸は顕著ではなく、長期間に及ぶ打棒(撥)使用による摩滅光沢が看取できる。③半球状を呈する下位部分は顕著な内面からの連続した敲打痕が見られ、表面の凹凸は顕著である。なお、口縁部上端から約15cmの部分(①+②)は、内面部分に施された細密な敲打部分とほぼ対応していることに注目できる。

次に内面に目を転じると、細密な敲打が施された上位部分と、明瞭な鋤頭痕(直径2.5cm)が連続する下位部分とに区分できるが、下位部分の鋤頭痕は底部から連続して同心円状に施されている。

現在、各種の仏具金物は鑄造やロクロ、仕上げ工程など細かく分業化されている。古来の惣型鑄造・込型鑄造から最新のCO₂鑄造まで、製品の形態に応じた方法が選択的に用いられている。これに対し、伝統的な鑿子の製作技法は一枚の地金板を人力によって根気よく打ち伸ばして製造する鋤起技法が用いられるが、この技法では分厚い地金板を焼き戻しては打ち伸ばすという工程を30回以上繰り返す。

例えば、長さ130cm×幅20cm×厚さ2cmの長方形真鍮板を円盤状に加工し、さらにその内面を打ち伸ばして口径・器高約40cm、器厚約0.1cmの鑿子に、約一ヶ月かけて仕上げる。打ち伸ばし作業は地板の伸び具合を見極め、部分

ごとに敲打力を瞬時に判断して打ち伸ばしていく。一打ちごとに高い集中力が必要とされるため、体力と技術が調和した期間は10年程度という。

一般的に、鋤起技法による荒打ちの伸ばし技術を習得するためには10年～15年が必要とされるが、激しい肉体労働であるため後継者が少なく、現在では鋤起技法で鑿子を製作する職人は京都に数名である。このため、作業量を軽減する分割成形技法ともいえる蠟付（溶接）技法で製作される鑿子も少なくない。これには鋤起技法による製品（本手打ち鑿子）が高価であるという経済的な観点も影響している。

溶接技法による鑿子の製作工程を概観すると、①鑿子の音色を左右する鑿子上端部の下加工を施した後、②窪んだ木型盤の上で金槌を使い、平らな板を徐々に絞っていく底絞りで製作した底部と、③口縁部付近の円筒状部品と胴部の円筒状部品の3つを溶接で接合し、金鋤で接合部分を潰して丸みを帯びた形に整える。④次に、炭とコークスを合わせた炉で鑿子を赤熱して焼き鈍し、金床にあてて金鋤で叩き形を整える。この作業を繰り返し、形を整えていく。⑤さらに、金鋤で金床に合わせて内側を隙間なく

叩き、鋤目をつけて仕上げる。⑥鑿子の形を整えた後、調律（鳴り出し）を行う。⑦最後に、漆焼付などで色付けをして製品化する。

鑿子の良否を決定する音色について、溶接技法で鑿子を製作する産地である富山県高岡では、甲・乙・聞と呼称する三音の波長・音程を揃えて完成させるが、この調律作業の前後では響きが全く異なるという。また、伝統的な鋤起技法で鑿子を製作する産地である京都では、理想的な音色は梶（撥）当り・唸り・余韻の調和が左右するという。

現在は需要の減少や価格的な問題から、蠟付（溶接）技法で製作された鑿子が主流ではあるが、形の美しさだけではなく音色が命の鑿子の製造方法としては、鋤起技法に優るものはないという。

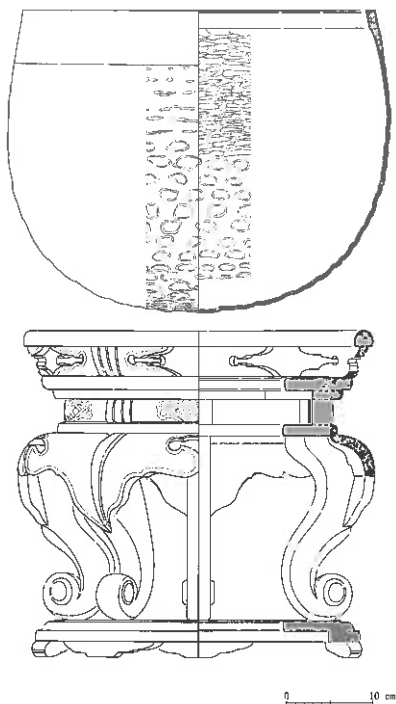
本寄託資料は経年変化による損傷もあるが、形制や特徴から往時の寺院用仏具一具として揃っている点が重要であり、幕末期の寺院用仏具の実態を知る一例として貴重である。

【引用・参考文献】

岡崎謙司監修、『仏具大事典』、鎌倉新書、1982

清水乞編、『仏具辞典』、東京堂出版、1978

京都府仏具協同組合 HP、富山県高岡市シマタニ昇龍工房 HP



第1図 鑿子・鑿子台実測図
(中東洋行実測・製図)



写真1 鑿子



写真2 鑿子口縁部外面の銘文

大坂のねりもの

北川 博子

2011年春は、大阪らしい展覧会が開催されていた。一つは大阪歴史博物館の「上方舞・山村流」、もう一つは大阪くらしの今昔館の「なにわの遊楽一芝居・祭り・花暦」である。ともに大阪市の博物館で、「文化の大阪市」をアピールできた好企画であった。本稿では、この二つの展覧会でも扱われていた「大坂のねりもの」について述べていきたい。

上方では寺社の祭礼の際に遊女や芸妓が仮装して練り歩く風習があった。京都では祇園の芸妓たちが祇園社の神輿洗いの日に練り歩くのが最も有名で、大坂では、新町、島之内、北新地等の遊女や芸妓が行っていた。このうち、旧暦6月15日の三津八幡宮の夏祭に行われた島之内のねりものについては、寛政10年(1798)刊『摂津名所図会』巻之四に、丹羽桃溪が描く挿絵(図1)があり、次の解説が載っている。

諸社の夏祭には女伶妓婦の輩いる、
に姿を優して花の盛の匂ふが如く身には
錦繡を絡みあるひは女も男に変わり若
も老の風俗して前囃子後囃子に琴三弦
胡弓太鼓笛にていさましく拍子どり
列り行を遷物といふ特にみな月十五日御
津八幡の祭には名にしおふ島の内の女伶風流
に粧ふて練あるく両側の青楼よりは妓婦
の輩共に花を飾て互に艶をくらべ見
に来る人もみなうかれて酒を勧めねり物す
がたにて揚づめの一夜妻とするも難波津の繁
花なるべし

夏祭人も潮のわくかこと 関更

図1には、茶屋の座敷から優雅に見物する人や、立ったり座ったりしながらひしめき合っている人たちがいて、そこを楽器を奏でる先囃子が通り、続いて仮装して歩いていくねり子たちが描かれている。先頭の芸妓は汐汲み、次は曾我五郎の扮装であろうか。行列と見物の様子が活写されている。

ねりものの遊女や芸妓たちは一枚絵にも描かれているので、ここで、大坂の浮世絵について触れておこう。浮世絵は世界に知られた芸術で



図1 関西大学図書館所蔵

あるが、誰でも知っている歌麿や写楽は江戸の絵師である。大坂の浮世絵は日本では馴染みが薄い、海外では“Osaka Prints”として評価が高い。江戸の浮世絵は役者絵、美人画、風景画などがバランス良く版行されていたが、大坂では役者絵が圧倒的に多い。しかし、天保期に江戸で北斎や広重が描いた風景画が流行すると、大坂でも新しい名所であった天保山を描き始める。しかし、美人画は版行数が極めて少ない分野であった。

その中であって、「ねりもの図」は一群を成している。京都では合羽摺で、大坂では錦絵で版行された。合羽摺とは、着色したい部分に切り抜いた渋紙を置き、上から刷毛で塗っていく技法である。長崎絵にもあるが、主として上方で用いられた。大坂でも作成されたが、色板で着色していく錦絵が江戸からもたらされると、大坂では錦絵が主流となった。

ねりものに際しては、大坂・京都ともに、出演するねり子たちをリスト化した文字番付と絵番付が版行されていた。一枚絵のねりもの図には版行年が記載されていないので、これら番付と照らし合わせて年次考証を行うのである。

さて、現存しているねりもの図を概観しておきたい。一番多くの一枚絵が確認できるのは文政5年(1822)年6月の新町で、江戸から上っていた柳川重信による大判組物14種があり、ねり子12人全員と、その他に先囃子と後囃子の各1名が描かれている。先囃子については、大坂

浮世絵界の第一人者、北洲も作品を残している。重信はこの他に色紙判摺物も手掛けているが、これは遊女から最上への配り物として制作されたものであろう。さらに、京都の絵師長秀も細判合羽摺の作品を残していて、現在7種を確認している。

その後、文政8年8月の新町は、よし国の大判6種、同11年6月の島之内は国広・重春の大判7種と無款大判3種、天保7年（1836）6月の島之内は重春・北英・北寿・貞広・初代貞信が描く大判12種と雪溪が描く小判12種、同8年の北新地は重春・北妙・貞信・貞広が描く大判8種、弘化3年（1846）6月の新町は中判13種と小判18種があり、ともに芳梅画である。

それでは、具体的に、天保7年のねりものを見ておこう。図2は「天保七申年島の内ねりものの番組」と題された手彩色の絵番付である。ねりものが行われる予定の日付「六月十四日 十五日 十八日 廿八日 廿九日」と、ねりもののテーマ「雑徳山四季詠合」が記されている。見附台は松で、この後、ねりもの行列のねり子たちが、①「けさう文 いた駒小なべ」②「末広 大清小絹」③「うかひ 松屋ゑん」④「若菜つみ 中森新とら」⑤「羽衣 京喜きぬ葉」⑥「感陽宮 中森新小浪」⑦「華陽夫人 同ゑい」⑧「湯屋戻り 京扇子やてう」⑨「はした女 中森新松梅」⑩「一夜官女 北森新いく」と絵入で描かれ、最後に、囃子たちの三味線、太鼓、琴は名前が、笛、鼓、鉦は人数があつて、最後に見送り台の御神馬が記されている。

この時の大判錦絵については、①⑥⑦⑧は重春、②③⑩は北英、④⑨は初代貞広、⑤は初代貞信が描いた作品がある。また、雪溪が描く①から⑩の小判錦絵も現存する。囃子では、三味線の大清小浪を北英が、同井筒屋二竜を北寿が大判錦絵に描き、大清小浪と太鼓の河音あいを



図2 関西大学図書館所蔵

雪溪が小判錦絵に描いている。

図3は関西大学図書館所蔵長谷川貞信コレクションの一品である。貞信は初代から現五代目まで血筋で継承されている上方浮世絵の画系で、関西大学図書館の初代から三代目までのコレクション



図3 関西大学図書館所蔵

は、収集の観点、分野、質と量等、世界最大の規模と水準を誇っている。

この絵を見ておくと、「島ノ内ねり物」「羽衣京喜きぬ葉」とあり、図版2の番付⑤と一致していることがわかる。ねりものは毎年新調される衣装に眼目があり、諸記録から柄や色などが忠実に描かれていることがわかっているが、江戸では禁止されていた金銀の絵の具も使われており、その豪華さが目を引く。

芸妓の名前の左にある「山村吾斗好」について解説しておこう。山村吾斗は前名山村友五郎、歌舞伎役者を廃業し、文化3年（1806）に今に続く上方舞の山村流を興した。山村流は現在では座敷舞の印象が強いが、江戸時代には歌舞伎舞踊の振付師としても活躍し、ねりものの衣装デザインや振付にも手腕を振るった。

上方のねりもの図は江戸にはない美人画として欧米では人気の浮世絵で、海外流出がかなり進んでいる。しかし、描かれた内容に関する研究はほとんどなされていない。そのためには、祭礼の行事としてのねりものを理解する必要があるが、ねりもの番付の現存率は低く、実態が把握しにくいのが現状である。本稿執筆に当たり、関西大学図書館を調査してみると、大坂で行われた様々なねりもの絵番付が多く所蔵されていることがわかった。今後、大坂のねりものを体系的に研究する必要性を感じているので、基本かつ貴重な資料として、これら絵番付の考察を深めていきたい。

【付記】本稿は平成23年度科学研究費補助金基盤研究(C)「上方浮世絵展企画に向けての国内外所蔵調査と作品の基礎的研究」(課題番号22520113)の研究成果の一環である。

阪急文化財団・関西大学博物館非常勤研究員

やきもの見聞録(3) 壺屋焼(沖縄県)

ちゅ うみ 美ら海の「やちむん」

熊 博 毅

やきものは、それぞれの気候や風土の中から、その土地の息づかいを受けて生まれるものなのかもしれない。だとすれば、蒼い空に純白の雲、紺碧の海に真白な砂といった自然美あふれる琉球・沖縄の地からは、雄大な自然や素朴な風景をそのまま写し取った、野趣豊かなやきものが誕生しても、何ら不思議ではない。

事実、大抵のことを波のごとく大らかに受けとめる琉球人の気質は、大地のように健やかな「やちむん(やきもの)」を生み出した。

茶道具や美術工芸品ではない、生活の中で毎日使う実用品。華やかさは少ないかもしれないが、「用の美」があるうつわたち。大胆さと優しさを持つ大地から生まれたやちむんの息吹きを聴いてみたい。そんな想いにとらわれ始めた。

水中写真を撮るため、これまで幾度となく沖縄の海へ足を運んできたわたしにとって、今回はやちむんの中に美ら海を探すことになりそうだ。そんなことを思いながら那覇へと向かった。

琉球陶器の歴史

15世紀に東南アジアとの貿易により南方系の陶技が伝来し、その後、17世紀に朝鮮や中国から陶工を招請。さらには薩摩などからも技法を導入し、それらを沖縄風に融和させ、独自の陶芸を発展させてきたのが琉球陶器である。

特に尚貞王14年(1682)、琉球王府が美里郡の知花、首里の宝口、那覇の湧田などにあった主要な窯場を牧志村の南、現在の壺屋に統合させて以来、多彩な窯技がこの地を中心に伝承され、多種多様なやちむんが作られ始めた。

じょーやき あらやち 上焼と荒焼

沖縄のやちむんは大きく2つに分けられる。1つは、貴族など上流階層の人びとの日用品として作られてきた「上焼」。もう1つは、庶民の日用必需品であった「荒焼」である。

「上焼」は沖縄本島北部の良質な粘土を船で運び、釉薬をかけ1200度を超す温度で焼成したもの。装飾性が高く、食器や酒器など、比較的小さいものが多い。のちには庶民生活でも用いられるようになったが、壺屋焼の主流となったのはこの「上焼」

である。

「荒焼」は本島南部の土を使い、釉薬を使わずに焼き締めたうつわである。土の吸水率が低いため、貯蔵を目的とする大型の瓶や壺を作るのに適しており、壺屋統合以来、1960年代までの間、上焼と並びこの地域の主力製品となった。

民藝運動と沖縄のやちむん

沖縄のやちむんを語るとき、「民藝」というキーワードを欠かすことができない。明治維新によって琉球王府が終わりを告げ、本土から地肌や装飾の美しい磁器製品が安価に移入され、やちむんの存続が危機を迎えたとき、沖縄民藝のすばらしさを全国に発信したのは柳宗悦や河井寛次郎、濱田庄司ら、民藝運動を主導した人たちであった。

昭和14年(1939)、柳や濱田らを中心に多くの民藝運動同人が沖縄を訪れ、沖縄のあらゆる文化や工芸を「琉球の富」として『琉球の陶器』や雑誌『民藝』などで紹介した。それによって多くの壺屋陶工は、自分たちのアイデンティティを再確認し、誇りと自信を取り戻していった。

沖縄の工芸振興

戦争は沖縄に深いつめ痕を残したが、幸い壺屋地域は戦禍を免れ、現在でも戦前の面影を留める貴重な地域となっている。

昭和29年(1954)、沖縄で最大規模の美術工芸展である「沖展」に陶芸を含む工芸部門が設けられたのが、沖縄の工芸振興に大きな契機となった。そこで活躍した小橋川永昌(1909~1978)、金城次郎(1911~2004)、新垣栄三郎(1921~1984)は「壺屋三人男」と称され、壺屋の伝統的技法を受け継ぎながら、それぞれの個性を活かして数多くの名品を生み出した。さらに彼らの技術は現代へと受け継がれ、新たな陶工たちが壺屋の歴史を刻み続けている。

作品クローズアップ

「琉球陶器」の技で国の重要無形文化財技術指定保持者(人間国宝)となった金城次郎の手による「魚文抱瓶」である。抱瓶は、三日月形の胴部に首と注ぎ口がつく、独特の形をした琉球特有の酒器である。もとは富裕層の人たちが、所有する田畑や山野を見て回ったり、競馬や闘牛見物などに携帯



したりするため、特別に注文して作らせたと言われ、手の込んだ装飾がなされているものが多い。紐で吊り、腰に当てて持ち

歩けるよう、紐とおしの耳がついている。

この抱瓶には2匹の魚が勢いのある線彫りで生き生きと描かれている。酒器の首の周りに施された緑釉が溶けてエメラルドグリーンやコバルトブルーの色を呈しており、魚の図柄と相まって沖縄の美ら海を連想させ、美しい。

民藝運動で金城に大きな影響を与えた濱田庄司は「次郎の海老や魚は笑っている」と評したが、金城らしさがよく出た作品である。

那覇市立壺屋焼物博物館

今から何年前のことだったか。那覇を訪れた際、少し時間があまったので、観光客で賑わう国際通りから公設市場のエリアを抜け、その南に位置する壺屋の街を歩いたことがある。そのときは、今と違ってやきものにはあまり興味がなく、沖縄みやげとして手ごろなシーサーでも求められたら、という気持ちであった。そのとき、壺屋の街中にある那覇市立壺屋焼物博物館も訪れたが、今となっては、ほとんど記憶に残っていない。そこで今回、二度目の壺屋は、この博物館を訪れることから始めた。やちむんのことを手軽に理解するのに、この博物館はうってつけである。

エントランスホールを抜けると、まずは常設展示室に足を踏み入れることになる。土器の時代から現代のやきものに至るまで、歴史の流れを追いながら展示と解説がなされ、その奥には壺屋の民家が復元されている。展示室壁面の大スクリーン映像で、戦前、戦後の壺屋の暮らしや仕事ぶりを知ることができるのも興味深い。

民家前のらせん階段を2階へ上がると、壺屋焼の製法や技法が紹介されている。また、この博物館を建設する際に発掘されたニシヌ窯も保存・展示されて



いる。

3階は、ギャラリーにも使用される企画展示室である。わたしが訪ねたときには「琉球陶器の来た道」という企画展が開催されていた。これは沖縄県立博物館との共同企画展であり、県立・市立の枠を超えたコラボレート展覧会として、今後の新たな動きを示唆するものと言えるであろう。

南窯

壺屋焼物博物館の南側、丘の上に「^{ふえーぬがま}南窯^{ふえーぬがま}」がある。琉球王府から拝領した窯の1つと伝えられ、荒焼窯として現存する唯一の窯である。主に酒壺や水甕、厨子甕などを焼いていた。傾斜地を利用した登り窯



は、長さ約20m、幅約3m。粘土でカマボコ型に塗り固められている。内部は屋根にあたる部分に支柱を設けているが、間仕切りはなく、トンネル状になっている。また、窯を覆う赤瓦の屋根は、耐火性を考慮し、琉球石灰石の石柱で支えられている。この南窯は、昭和48年（1973）3月19日、沖縄県の有形文化財に指定された。

壺屋焼物博物館から南東へ伸びるやちむん通りには、沖縄の陶芸作家の作品を販売する陶芸店が軒を連ねている。博物館でやちむんの歴史を学んだあと、わたしはやちむん通りにあるこれらの店をゆっくりと眺め歩いていった。

金城次郎をはじめとする沖縄の陶芸家の作品には、海洋生物をモチーフとしたものが多い。居並ぶ作品を観ているうちに、いつしかわたしの身体は深い海の底に沈んでいた。紺碧の美ら海で身を翻す生き物たちの姿をやちむんの中に見つける、というわたしの願いは取りあえず叶えられたようだ。しかし、美ら海のやちむんに魅了される旅は、今しばらく続きそうである。



年頭行事の飾り物

森 本 安 紀

年頭行事は一年のはじめを祝うため、さまざまな思いが儀礼にこめられている。新しくはじまる年がよいものになるように、五穀豊穡や家内安全を願い、一年間の農作業をまねて演じる予祝儀礼や、前年の厄を祓って新しい年への節目を祝う儀礼などを行う。

年頭行事で作られる飾り物にも、これらの祈りが表れており、儀礼の際に神社や寺院に飾られた飾り物を、その儀礼の参加者や、集落の各家に配るところがある。床の間や玄関口に飾ったり、水田の水口などに立てることで、一年間の家内安全や、稲の実りが各家にもたらされるという。

また、神社や寺院に供えられた鏡餅も、儀礼の後に各家に分配され、これを食べることで、厄を祓い、健康になるとされている。ほかにも、儀礼の参加者が飾り物に触れたり、厄年にあたった人が作った飾り物を燃やすことで、厄が祓われるという。

このような儀礼の中で重要な位置を占める年頭行事の飾り物には、さまざまな形態のものがある。華やかな造花で飾ったものや、多くの人びとに分けることができるように、普通より大きく作るものがある。

兵庫県神戸市北区道場の太福寺で2月11日に行われる修正会は、雀の頭とうと呼ばれている。

修正会は、寺院で行われる年頭行事であり、経典の転読や牛王宝印の授与などが行われる。太福寺では、前年に生まれた新生児が泣きはじめるまで大般若経の転読を行い、僧侶が手にした経典を、参列者の額にあてることで、厄が祓われるという。この転読が行われる堂内の壇上には雀の頭と呼ばれる飾り物が置かれる（写真1）。これは柳を材料とし、削り掛けと呼ぶ花の上に木彫りの雀の夫婦を挿したもので、雀の仲の良さから夫婦円満の象徴とされている（写真2）。儀礼が終わると雀の頭は参列者に分けられ、持ち帰って家に飾ることで、家内安全のお守りとなる。道場では、この行事が終わると

各家で雛人形を飾って桃の節句の準備をはじめ、本格的な春を迎える行事となっている。

滋賀県木之本町杉野中の薬師堂では、2月7・8日に花の頭とうが行われる。花の頭も、淡い桃色の造花がたくさん飾られた、華やかな飾り物の呼び名が、そのまま行事名になっている（写真3）。この花の飾り物は、桜の花や稲の花を表しているといわ



写真1 雀の頭



写真2 雀の頭



写真3 堂内に飾られた花の頭



写真4 網打神事・大蛇の頭

れており、これも春を迎え、豊穰をもたらす願いがこめられたものである。

この儀礼の準備は、2月7日に行われるが、花の頭だけは、祭りの責任者である頭屋の家で、前年の11月ごろから作りはじめる。この花の頭は、7日に頭屋の家の床の間に飾られ、その前で餅を搗いて、供え物の鏡餅を作る。できあがった鏡餅などを床の間に飾ると、ヨミヤと称して賑やかな宴会を、夜を通して行う。鏡餅を作る部屋と、花の頭を飾っている部屋は女性の立入りを厳しく禁じている。

花の頭や鏡餅などは、8日の早朝に薬師堂へ運ばれ、堂内に荘厳と呼ばれる飾り付けをする。この荘厳の前で、松明を持った人が走りまわる儀礼や、直会^{なほらい}と呼ぶ会食が行われる。儀礼の終わりに、鏡餅を切り分けて各家に配り、花の頭は翌年の頭屋宅に飾られる。

滋賀県大津市の長等神社では、1月15・16日に網打神事が行われる。14日に大きな頭と長い尾を持つ大蛇を藁で編む(写真4)。橙をはめこんだ目と、大きな口を開けた頭部は拝殿に飾り、長く編まれた胴体部分は神社の楼門外まで伸ばす(写真5)。かつては各氏子町が競いあって藁を持ち寄り、尾の先は、氏子区域の境界である電车道にまでおよび、約600メートルの長さもあったという。15日は小正月のトンド焼きのため、早朝から氏子の人たちが古札や注連縄を持ち、大蛇の尾を踏みながら、楼門から神社に入って参拝する。大蛇の尾を踏むことで、参拝者の厄を移すことになるという。大蛇は16日に燃やされ、藁蛇に移された厄を祓う。



写真5 網打神事・大蛇の尾

福井県鯖江市の八幡神社では、2月第二土曜日(もとは1月15日)に左義長の行事がある。藁で作られた大きな円錐形の土台に、3本の竹がさしこまれた、左義長を立てる(写真6)。竹に赤い三角の飾りを吊すが、この飾りは厄年にあたった女性が作り、奉納することになっている(写真7)。これを燃やすことで、厄が祓われるのである。また、左義長が燃え終わる直前に、真中の竹に飾られたお供えが描かれた板を参列者で奪い合う。新築の家の梁に置いておくと火事を防ぐのだと伝えられている。

年頭行事の中の飾り物には、その一年を健康に過ごし、豊作を祈る人びとの願いがこめられている。



写真6 左義長



写真7 左義長の飾り

関西大学博物館蔵 磨製石剣2点について

金 大 珍

関西大学博物館には、網干善教名誉教授の紹介により奈良県大和高田市在住の篤志家から平成9年に寄贈された朝鮮半島出土の石剣2点がある。ここでは、この磨製石剣を紹介したい。

写真1奥の磨製石剣Aは、黒色泥岩製であるが全面が風化して明灰色になっている。片面に泥岩の石理を見せ、特に柄部片面は装飾的な様相となる。全長38.0cm、刃部長26.3cm、刃部厚最大15.1cmで、剣先から刃部まで断面が菱形に見事に整えられている。顕著な使用痕などは認められない。青銅製剣を大きくデフォルメして柄部が変形し、鏢部で幅15.0cm、柄尻でも推定幅15.0cm程度に伸延されている。柄握部が丸められておらず、角張っていることから未製品とも考えられる。

写真1手前の磨製石剣Bも、黒色泥岩製であり全面が風化して明灰色になっている。片面に装飾的效果を意図したかのように泥岩の石理面を大きく残す。全長31.9cm、刃部長24.0cm、刃部最大幅52.5cm、柄部長9.2cm、幅7.2cmを測る。断面は石理面を除いて菱形となっている。その形状は青銅剣の特徴をそのまま写している。



写真1 石剣（奥：A 手前：B）

両磨製石剣とも石灰華の付着状況などに疑問もあるが、朝鮮半島南部の磨製石剣に特有の黒色泥岩を使用しており、全表面が安定した風化面に覆われていることから、偽物である可能性は排除できる。

磨製石剣は、青銅器文化期の青銅製剣を模し

た石器であり、主に紀元前7～8世紀から紀元1世紀頃に盛行した。朝鮮半島では、磨製石剣は約200ヶ所以上の出土があり、支石墓、石棺墓や集落などで出土している。日本列島の磨製石剣は、縄文時代晩期から弥生時代前期にかけて見られるが、主な出土範囲は九州北部に集中し、西日本に限定される傾向がある。

磨製石剣の柄の作り方で大きく二つに分けられ、柄の部分まで含んだ剣全体を一つの石材から作りだしたものを有柄式、柄に木材などをつけて使用するものを有茎式とされる（有光1959）。朝鮮半島北部には有茎式磨製石剣の出土が多く、南部に行くにつれて有茎式磨製石剣は減少する反面、装飾性が高い有柄式磨製石剣の出土が多くなる。

関西大学博物館の磨製石剣Aは、柄部の突出が大きい装飾性の高いものであり、韓半島でも支石墓で有名な金海茂溪里遺跡と釜山槐亭洞遺跡で類似するものが出土している。金海茂溪里遺跡（金1963）は長幅2.3m×1.2mの大きさを持つ支石墓で、出土した磨製石剣は全長46cmである（写真2）。磨製石鏢8点、青銅鏢3点、官玉3点が出土し、青銅時代後半の遺跡とされる。釜山槐亭洞遺跡（鄭1977）の支石墓は一部破壊されており、現存で長幅1.8m×0.7mとなっている。紅陶、磨製石鏢、磨製石剣などが出土している。

両遺跡とも釜山地域にあることから、関西大学で収蔵されている磨製石剣Aは朝鮮半島南部の青銅器文化と密接な関連性を持っているといえる。

磨製石剣Bは韓半島の中部から南部にかけての地域で代表的に扶餘松菊里遺跡（安・金1975）、寶城德峙里支石墓群（尹1988）などで出土するものと類似する（写真3）。扶餘松菊里遺跡は、土器や磨製石鏢、甕棺墓、曲玉、銅剣などが出土した大規模な集落遺跡として知られている。寶城德峙里支石墓群も同じく銅鏢、石鏢などが出土している。磨製石剣Bから、青



写真2 金海茂溪里遺跡出土石剣 (金1963)



写真3 寶城德峙里遺跡出土石剣 (尹1988)



表面



裏面

写真4 石剣

銅器文化の地域を限定するのは難しいが、磨製石剣Aと同様に支石墓から出土する傾向が見られるので、朝鮮半島南部のものである可能性が高い。

今回紹介した関西大学博物館が収蔵する2点の磨製石剣は、朝鮮半島のもっとも特徴的な石剣である。これに類似する石剣が九州を中心として日本列島でも発見されている。朝鮮半島の青銅器文化から日本列島の弥生文化へという流れを考える上で非常に重要な役割を果たすであろう。

磨製石剣は、時代の変遷や地域文化の差を敏感に反映した出土状況を示しており、これを研

究することによって機能や社会的意味の変化を把握できる重要な遺物であると考えられる。今後、類似する遺跡や出土遺物などの比較を行い、さらに東アジアの石剣について研究をおこなっていききたい。

参考文献

- 有光教一 1959『朝鮮磨製石剣の研究』京都大学文学部考古学叢書第2冊
- 尹徳香 1988「徳峙里신기支石墓」『住岩畺水没地域文化遺跡発掘調査報告書』Ⅲ
- 金元龍 1963「金海茂溪里支石墓의 出土品」『東亞文化』1
- 鄭澄元 1977「釜山槐亭洞遺壙棺墓」『考古學』
- 安承周, 金永培 1975「扶餘 松菊里 遼寧式銅檢出土 石棺墓」『百濟文化』7

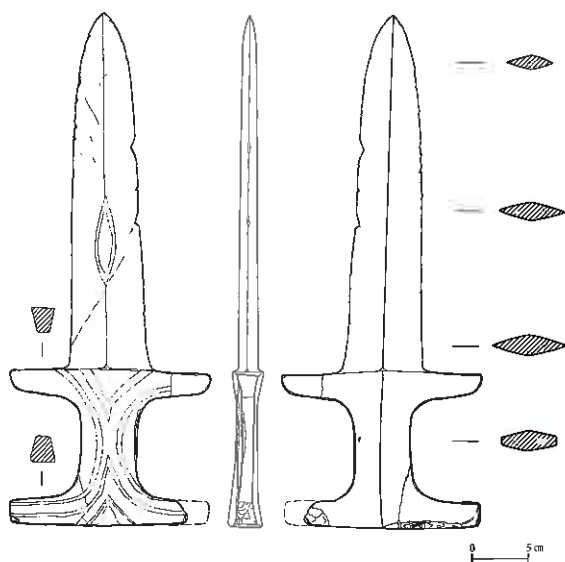


図5 石剣A実測図

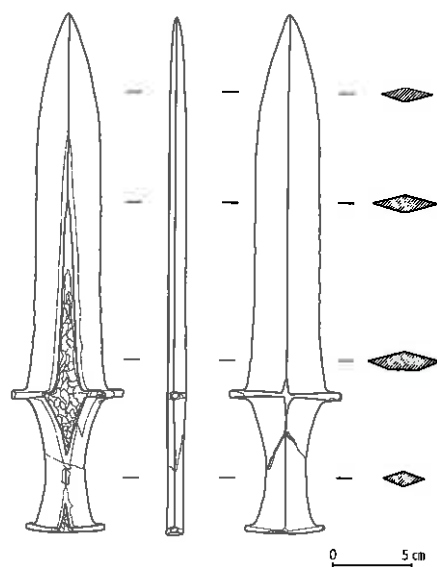


図6 石剣B実測図

登録有形文化財 関西大学博物館蔵本山彦一蒐集資料

本山コレクションの登録有形文化財登録

平成23年6月27日、文化庁は「本山コレクション」(18,945点)を登録有形文化財(美術工芸品部門の考古資料)に登録することを官報第114号に告示した。これによって、関西大学博物館蔵の本山彦一氏蒐集考古資料のすべてが国の指定文化財、および登録有形文化財となった。今回の文化庁による登録は、美術品(絵画・彫刻・工芸品・書跡典籍・古文書・考古資料・歴史資料)としては13例目であり、考古資料としては、「越中地域考古資料(早川荘作蒐集品)」「(富山県)」、「飛騨地域考古資料(江馬修蒐集品)」「(岐阜県)」に次いで3例目、大学博物館蔵考古資料としては初めてである。登録有形文化財美術工芸部門には、特定の個人や組織が一定の期間に形成した、学問的、学史的な価値をもったコレクションが登録される。なお、平成18年、「簡文館」(旧図書館、現博物館)が建造物部門で登録有形文化財の登録をすでに受けているので、これで関西大学は二つの登録有形文化財を有することとなった。

「本山コレクション」とは、明治36年、大阪毎日新聞社第五代社長となった本山彦一(大正

8年から同11年まで関西大学評議員)がその生涯にわたって蒐集した考古資料等であり、そのなかには大坂の町人学者として知られる木村兼葭堂が所有していたものや、日本ではじめて開かれた博覧会「大学南校物産会」に柏木政矩(明治政府の官僚)が出陳した石器類、さらには神田孝平(初代兵庫県令、のち衆議院議員)が蒐集した資料をもふくんでいる。本山は、堺市浜寺に「富民協会農業博物館本山考古室」をつくったが、これら蒐集資料の整理と目録作成を京都大学教授浜田耕作(号、青陵)に依頼した。浜田は考古学研究室の末永雅雄(関西大学名誉教授、昭和63年度文化勲章受賞者)と小林行雄(京都大学名誉教授)に担当させた。昭和8年には『本山考古室図録』が刊行されるが、その前年、本山は永遠の眠りにつく。享年80歳であった。本山が鬼籍に入ったのちも、昭和9年に『本山考古室目録』が、その翌年に『本山考古室要録』が相ついで刊行された。これらに末永は、近代的な資料観察法を駆使し、画期的な実測図を多数掲載し、日本考古学全体の近代化を促進した。

昭和27年、末永が関西大学文学部教授として迎えられると、本山家から「父が学界に寄与すべく蒐集した資料であるから、できるだけ末永

の所属する大学にあることが望ましい」との尊意が示され、末永の渾身の情熱と尽力によって、その翌年から「本山コレクション」が関西大学に移管されることになった。



図1 本山彦一氏



図2 本山コレクションの蒐集範囲
(本山考古室要録)

本山コレクションの価値

本山コレクションは、縄文時代から弥生時代、古墳時代、歴史時代の日本の考古資料と、同時代の中国・朝鮮半島、琉球・南西諸島から千島列島、台湾や朝鮮および満州、南洋諸島の領域の考古資料、「参考資料」としてエジプトやローマ、南北アメリカ大陸などの考古資料や民族資料からなっている。関西大学博物館が収蔵する本山彦一蒐集資料は、『本山考古室目録』に従えば「石器時代遺物」1,297件中1,052件17,017点、「古墳時代その他」370件中295件1,996点、「参考資料」98件中91件286点、合計1,765件中1,438件19,299点が確認された。重要文化財指定、重要美術品指定を除くと、「石器時代遺物」16,991点、「古墳時代その他」1,668点、参考資料286点の合計18,945点を所蔵する。この中には、貝塚の貝殻や獣骨等自然遺物を含むもの75件がある。他に、『本山考古室目録』と対照できないが、本山蒐集資料と推定できる160件441点がある。

コレクションの形成過程を振り返ってみると、江戸時代に好事家に集められた資料が、明治以降、考古学資料として認知されるまでの経緯が読み取れ、考古学史上重要なコレクションであることが明らかとなった。また、本山自身の活動から、東アジアにおける当時の日本の勢力の及ぶ範囲から資料を蒐集するという時代的特徴まで読み取ることができる。

図3は、木村兼葭堂が蔵した鍬形石で、木内石亭が神代石之図（図4）に記録している。奈良県島の山古墳出土である可能性がある。図5は茨城県福田貝塚出土の土偶である。多数の縄文時代資料には、神田孝平初代東京人類学会会長などの蒐集品も多数引き継がれている。図6の銅鐸は、神田孝平が東京人類学雑誌に報告し



図5 土偶



図6 銅鐸

ている。図7のペルー土器は、大阪毎日新聞の南米特派員が現地で遺跡を発掘して昭和2年に本山のもとに持ち帰ったものである。この他、本山彦一が調査団を率いて行った、大阪府国府遺跡の縄文時代墓地や、長門國鑄銭司遺跡、台湾圓山貝塚、三陸海岸の縄文時代貝塚などの調査資料も、学史的に評価されている。

関西大学博物館蔵本山彦一蒐集資料は、それぞれの資料個体の価値を超えて、本山彦一とそのコレクション形成に関与した人々が織り成す、輻輳した歴史的価値を有しているといえる。この貴重な本山コレクションは、関西大学博物館にて収蔵し、一部を常設展示するとともに、学内外の教育研究に資するために広く活用していきたい。（山口）



図3 鍬形石



図4 木村兼葭堂蔵鍬形石之図



図7 南米ペルー発掘の土器

◆ 博物館だより

◇平成 22 年度関西大学博物館 開館日数・入館者数

	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月	計
開館日数	26	22	25	24	6	8	21	23	17	16	13	20	221
入館者数	1,929	2,674	600	366	2,374	154	509	1,520	160	195	276	286	11,043

◇春季企画展 登録有形文化財登録記念展示会「関西大学博物館蔵 本山コレクションの由来」を 4 月 1 日から開催しました。本館にとって節目となる展示会であり、6 月 30 日まで会期を延長して公開しました。また、5 月 14 日には、宮内庁書陵部の徳田誠志先生にご講演いただき、本館所蔵資料に関する最新の調査結果が発表され、聴講された 82 名の皆さんに大変喜んでいただきました。企画展期間中 4,060 名のかたにご観覧いただきました。

◇博物館が入っている簡文館（平成 20 年登録有形文化財登録）の耐震補強工事のため、7 月 1 日から休館しています。工事に伴い、毎年地域の皆さんに楽しんでいただいている「なんでも相談会」を残念ながら今年度は中止しました。博物館は、工事が終了する 10 月 11 日からリニューアルオープンします。

◇高松塚古墳壁画再現展示室のイメージキャラクターに新しい仲間が増えました。学生がデザインした高松塚古墳壁画の四神の着ぐるみで、ロン（青龍）、タイガ（白虎）に加えて、スー（朱雀）とシェン（玄武）です。昭和 47 年に高松塚古墳が発掘されて、来年で 40 年になります。関西大学では、現在でもさまざまな角度から高松塚古墳研究が行われ、この貴重な文化遺産を後世へと伝え続けています。

◇平成 23 年、本学博物館学課程は創設 50 周年を迎えました。4 月 3 日に奈良県立橿原考古学研究所長の菅谷文則先生をお迎えして記念講演会を開催し、当日は 97 名の同窓生が集まり、先生方を囲んで旧交を温めました。また、これを機会に、本学博物館学課程出身者を中心に、相互に連絡・協力できるよう関西大学博物館・文化財ネットワーク（仮称）を設立することになりました。活動内容等は今後の課題となっていますが、興味や関心をお持ちの方は、事務局までお問い合わせください。



・ ・ ・ 編集後記 ・ ・ ・

本年度上半期に貴重な資料の数々をご寄贈賜りました。まずは、本山彦一氏のお孫さまでいらっしゃる上杉康彦様から本山彦一直筆の親書一通、また、本学校友で刀匠の河内國平先生から末永雅雄先生のために鍛錬された日本刀一振り、さらに遠山慶一様（本学校友）から、平成 22 年度に引き続き貴重な武家装束の品々。今後、博物館で充分活用していきたいと考えています。

表紙は、岩手県大船渡から出土したホタテ貝製の貝輪未製品（本山コレクション）です。本山コレクションには、細浦貝塚をはじめ三陸沿岸の遺跡から出土した骨角器等が多数含まれています。大船渡湾を臨む地

域は複雑な海岸線を呈したりアス式海岸で、内湾性と外海性の両面を備えた環境にあり、関東以北では最も縄文時代の漁撈活動が盛んな地域の一つです。貝輪は、主に女性が腕に装着したものであったと考えられています。

3 月 11 日の未曾有の東日本大震災による甚大な被災を受けた方々に対し、心からお見舞い申し上げます。この地震により多くの博物館や文化財が被災しましたが、一日も早い復興をお祈りいたします。